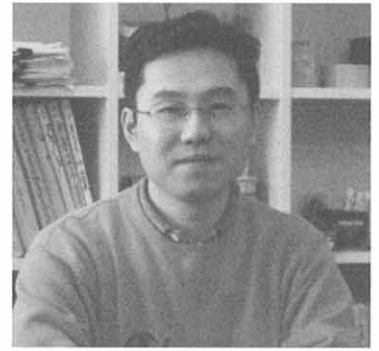


地元学から連携協働の里地里山づくりへ

—戸沢村・角川里の自然環境学校の事例から—



出川真也 (でがわ しんや)
 特定非営利活動法人 里の自然文化共育研究所 専務理事
 角川里の自然環境学校 研究員
 山形大学高等教育研究企画センター戸沢分室 助教

山形県内陸北部・戸沢村角川地区に住み込んで5年目になりました。角川の住民による多様な里地里山活動は、外部者の受け入れ、行政・企業・大学など多様な主体との連携、他の里地里山地域との交流等様々な方面にその幅を拡大しています。

今回は地元の活動団体・角川里の自然環境学校を事例としながら、住民による学びと里地里山保全活動のこれまでを振り返り、今後の地域に根ざし外部にも開かれた里地里山活動の可能性を展望してみたいと思います。

1. 戸沢村における「地域の学校づくり」と角川地区の「地元学」

戸沢村ではふるさとでの「よさ」をもう一度見つめなおしてみようと「地域の学校づくり」というスローガンのもと、ふるさと学習の取り組みを盛んにやってきました。戸沢村内で最も山間地にある角川地区(人口約1千人)では地元の有志住民で南部里地探検隊という団体を作って源流に探検に行ったり、ギフチョウなどの希少種の探索会を子ども達とやっていました。私が戸沢村に入るきっかけもこういう取り組みを地域から勉強させていただきたいということだったのです。しかし、実際に入ると活動に参加していると、地元で中心となっている方々から悩みも耳にすることになりました。「こういう活動をやっても、イベント的で一過性の取り組みで終わってしまったり、一部の住民だけの参加になってしまったりしてなかなか広がっていかないんだ」というのです。改めて活動を見直してみるとなるほど確かに地元でもここはすごいなという所やこれは際立っているなという所だけがクローズアップされていることに気がつきました。これでは限られた層の住民にしか関心を払ってもらえません。でも実は地元住民が普段意識せず何気なく行っている

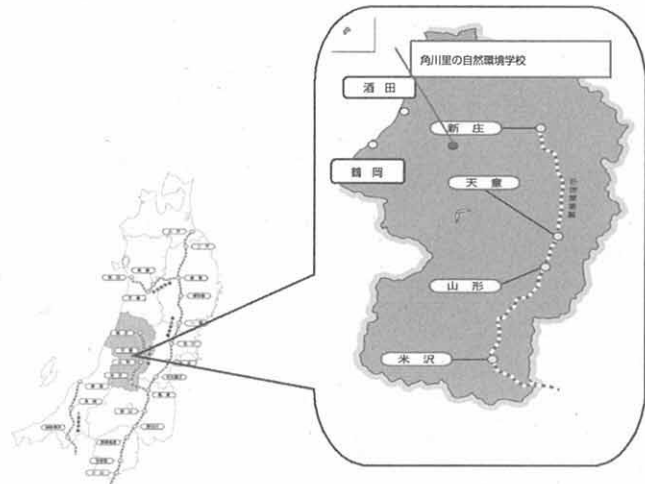


図1 戸沢村角川地区の位置関係 角川地区は山形県内陸部戸沢村の中山間地域に位置する。人口約1千、3百世帯。最上川の支流角川に開けた14の山村集落からなる。

暮らしの営みやありふれたもの(こと)にこそすばらしい価値が見出せたりもするわけです。

住み込みで勉強を始めると最初住民からは「出川君、なんでこんな何もない村に来たんだ?」と言われました。しかし私から見ると何もないどころかいろいろと興味深い暮らしの営み、自然環境の営みというものがあるように思えます。そこでそういった事の一つ一つできるだけ丹念に聞いていくという作業を続けていきました。そうする

と二ヶ月、三ヶ月としばらくたつと今度は逆に地元の方から「出川君、あそこにはこんなものがあるから見ていった方が良い」とか、「今こういう行事があるから参加してみたら?」という事が増えてきました。ついにとても私一人では調べきれなくなりましたので。

そこで「角川地区の中心集落で地元の方々、子ども達とみんなの力で一緒に調べましょう」という話になりました。これを「地元学」と私達はよんでいるのですが、地域

地元学の流れ

1. 基本的なすること
 地域の人とよそモンと一緒に集落を歩いて、「あるもの探し」をする。
2. 地元学調査(調査方法はいたって簡単)
 ステップ1: じいちゃん、ばあちゃん、その他集落の人、よそものが集まる。
 ステップ2: 集落や集落の周辺地域をいっしょにまわり、よそものが面白そうだと思うことやものを集落の人に質問し、それを写真に撮り、集落の方の説明を資源カードに記入していく。
 ステップ3: 調査からかえってきたら、その結果をカードをもとに発表。(地域内コミュニケーションの活性化と情報の共有化)



ステップ4: 調査からかえってきたら、その資源カードをもとに地図に書き込んでいく。また資源カードを整理し一覧表を作ります。

↓
 地域環境マップと生活文化大百科の出来上がり。



集落を地元の方々と、私のような地域をよく知らないヨソモンが一緒になって、山に行ったり、石碑を見たり、家々を見て回ったりする。そして地元住民に質問をしながら教えてもらうという。ただそれだけのことです。でも、農山村、里地里山地域の自然とか文化というのはなかなか見ただけでは分からない。聞いただけではもちろん分からない。あまりに違いすぎて分からないわけです。その地域独自のもの、その地域でしか通用しないものが数多くあるので内部に入って実際にやってみて、はじめてようやく分かるということがよくあります。だから調べ方のコツとしては、聞いて、見て、実際にやってみて、というように調べました。このことはこの調査手法が特定の研究者だけではなく、いろんな人々が一緒に調べることができるということを意味します。最後はみんなで集まって調べた情報を地図に書き込んだり、カード化したりして発表会をすることで情報を共有しました。

2. 角川里の自然環境学校の設立と活動の展開

〈設立のきっかけ〉

地元学の結果よりリアルに地域集落が自然と文化が豊かだということを再発見することになりました。それは私のようなヨソモンが再発見したというのではなく(私自身は最初からこの地域がすごいということには気が付いていた)、地元の住民自身が、外部者の目線の違いを利用して自ら持っている知恵や技術、その価値を再発見したということです。同時に課題の部分も見えてきました。この集落では一日の調査で500くらいのものが再発見されましたが、その2割ほどは10年後と言わずこのままではその価値や存在すらも気が付かないまま1~2年で消えてしまいそうということが明らかになりました。あの婆さんがいなくなるとこの郷土料理の製法は分から



図2 角川地区全景写真

清流角川に沿って集落が展開している。周囲の山々は高いところでも標高200メートルあまりであり、そのラインより内側の地域が地元では「内山」とよばれる里山の領域を形成している。集落に隣接しており里の人々が継続的に手をいれ維持管理している領域である。角川里の自然環境学校の集落共同の活動もこの範囲を中心に行われている。

なくなるとか、あの爺さんがいなくなると、あのマタギのおじさんがいなくなると、あの里山はどうやって管理していたのか分からなくなるとか、こういったことが実感を持ってきたのです。「このままでは本当に何も無い集落になっちゃうぞ」「何かせねば」という話が調査をした住民たちの間から出てきて、「では、地域の自然や文化を次の世代に教え伝えていく取り組みをしていこう、その中で地域づくりを考えていこう」、そして「それは誰が教えることが出来るのか。やはり地元の住民しかいないだろう」ということになりました。こうして角川地区の住民が「里の先生」として、活動の中心となって運営する取り組みができあがりました。「角川里の自然環境学校」です。

〈活動の内容〉

角川里の自然環境学校では、取り立てて目立つようなお祭りやイベントは行いません。まずは、角川の日常の自然や生活文化を外部の住民と共有しつつ学びあうことが大切だという思いがあるからです。普段の里の暮らしの営みをきちんと見つめながら里づくりを進めようとしています。したがって、四季折々の里の自然や暮らしそのものが学習活動のメニューとなっており、地域住民が日常の暮らしの延長線上で以下の6つの学校を運営しています。(図3)

山の学校… 地元のまたぎのおじさんたちが中心となって運営しています。里山の保全や生き物の生態、山菜やキノコ採りの知恵や技術を伝承しています。

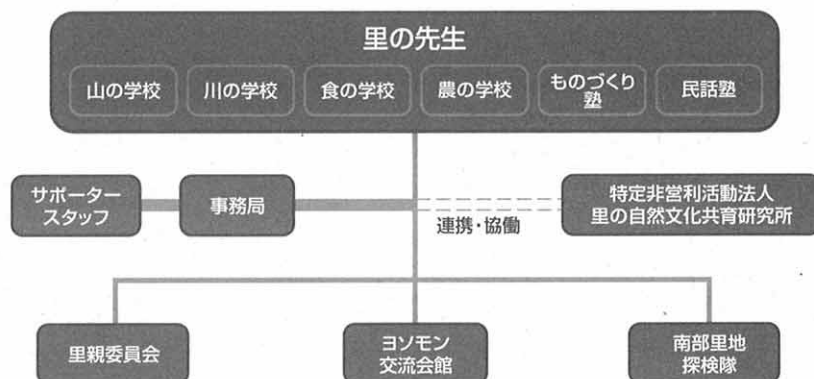


図3 角川里の自然環境学校組織図

川の学校…子どもたちにもっとも人気のある学校。地元の漁師さんたちが先生役となって、伝統漁法を中心に魚捕りの技術を教えます。また、川遊びや水辺の生き物観察会などを行っています。

食の教室…里山や川、農地から取れる新鮮な素材を使って、角川の里ならではの郷土料理の教室を開いています。ここでは地元のおばさんたちが先生役。加工場も開設され角川の食文化を外にも発信しています。

農の学校…田んぼビオトープや無農薬の米作りに取り組む「田んぼの学校」、無農薬の野菜作りに取り組む「畑の学校」があります。中山間地域で農業を営む農家の皆さんが先生役で「角川カブ」などの伝承野菜の保全と伝承にも取り組んでいます。

ものづくり塾…主に地元の高齢者が中心となって里山のつるなどの素材や田んぼのわらなどの素材を利用した山村の工芸品の伝統技術を伝承しています。

民話塾…雪深い角川の里には多くの民話が伝わっています。笑い話、悲しい話、村で暮らすことの心得など、地域生活に密着した民話が数多くあります。独特の方言で語られる角川の民話塾は地域の心を伝える場ともなっています。

里親委員会

角川の体験活動には、外部からの参加者は1泊2日以上行程で訪れることになります。そこで、そうした外部の参加者にホームステイしてもらおうと始まったのが、角川の山村ホームステイ制度です。受け入れにあたってお客様扱いではなく共に村のことを学び、里づくりにかかわる仲間として受け入れたい、だから親戚の延長線上で受け入れようという話になりました。そこで集落住民の有志で「里親委員会」を結成。現在60軒ほどが里親登録をしており、地域生活に密着したより内容の濃いプログラムが行われています。

4. 角川の里地里山活動から 見えてきたもの ～子どもたちの声から～

このような活動を続けていると子ども達から将来この里で暮らして地域のよさを発信していきたいという声が出てきました。ある日、地元小中学校の先生からよばれ、「生徒に作文を書かせると最近では地域のことを書く子が増えているようだ」と言って次のような作文を見せていただきました。

地元の中学生の作文より

「『角川?どこにあるんですか』…こう聞かれて恥ずかしいと思ったことがあります。なぜなら、僕にとって、角川は何もないただの田舎だったからです。僕が暮らす角川は、ヤマメやイワナがたくさん泳ぐ美しい川に沿って小さな部落が点在する地区です。都会の人は、『自然がきれいでいいね』『ゆとりできていいね』などと言いますが、僕は心の中で、それは違うと思っていました。田や畑仕事の大変さや、町から遠いことによる不便さ、そして高齢化や過疎化など深刻な問題もたくさん抱えているからです。…(中略)…角川の地元学は、便利さなど表面的なものに憧れ、自分の身近なものの本当の価値に気づけなかった僕が、足元を見直す貴重な体験となった…(中略)…若者がいない、活気がない、大型スーパーがなくて不便だというマイナス面だけがクローズアップされてきました。『昔はこんなじゃなかった』とは言っても、どのようにすれば若者が引き留められ活気を取り戻せるのか、真剣になって解決策を考え実行しようとする人は誰一人いませんでした。

今は大人が立ち上がり、解決策を考え、大切な文化を子ども達に伝えようとしています。…(中略)…真剣になっている大人の心を、僕たち子どもがしっかり受け止めなければいけないと思います。そういう気づきをこれからも大切にしながら、『元気のある田舎角川』を全国に発信したいと思います。」

5. 最新の状況

～連携協働、新たな仲間作りに向けて～

角川の活動は、地区を越えて広がりを見せようとしています。上流に位置する角川地区は近年特に中下流域の農村や海辺の集落との交流活動を積極的に行っています。食文化交流や子どもたちのふるさと学習の交流など、密接な関係があるけれどもこれまで十分つながりをもってこなかった地域との連携ができつつあります。また、行政をはじめとして企業、学校、大学、他のNPO団体等と連携した新たな里づくりとその多様な展開を模索し始めています。2007年11月には、こうした多主体・広域連携の動きを活性化させるべく角川里の自然環境学校から「NPO法人里の自然文化共育研究所」が立ち上がりました。新たな仲間作りと人づくりが里の自然や文化の新しい再生につながる、そんな思いを持ちながらこれからも私たちの活動は続いていきます。

[連絡先] 〒999-6403

山形県最上郡戸沢村大字角川481-1

戸沢村農村環境改善センター内

TEL/FAX 0233-73-8051

E-mail sato-school@orion.ocn.ne.jp



図4 山・里から川・海そして都市住民との協働へ